

表白文における祈り

桃 尾 幸 順

(四天王寺国際仏教大学)

一 はじめに

表白は、また啓白、開白ともいい、法会や修法などの際にその趣旨や願いを神仏の前に申し述べることであり、普通は導師によって執り行われる。表白は原則として法会ごとに新たに作られるものであり、各宗派において古より現代にいたるまで作られ続けている。したがってその数は膨大なものとなり、宗派によってもそれぞれ特徴あるものとなっているのであるが、ここでは天台宗系と真言宗系の表白文をいくつかとりあげて、表白文の中に込められた祈りについて考えてゆきたい。

二 表白の起源

表白に対する解説は、宋代の文献である『大宋僧史略』にみられるが、そこには、

唱導とは、始め則ち西域の上座凡そ請に赴かば呪願して曰く、「二足常に安ず。四足また安ず。一切時の中皆吉祥」等と。以って檀越の心を悦可するなり。舍利弗弁才多く、曾て上座と作りて、讃導頗る佳しに、白衣大いに

表白文における祈り（桃尾幸順）

歡喜す。此れ表白の椎輪と為すなり。⁽¹⁾

という記載があり、これによると表白は唱導と同じ意味で用いられていることがわかる。唱導は古くから行われており、梁の簡文帝の唱導が『広弘明集』に採られているが、この唱導は内容や様式において後世の表白に通じているものがある。ただ唱導は聴衆に仏法を教化し教え導くことを目的としているところに表白との相違が感じられる。しかし表白は、前述したように表面的には神仏に対して法会の趣旨や願意を申し述べるということが目的としている。この神仏に対してなされるという表白の起源はおそらく密教にあると考えられる。

密教經典において、表白あるいは啓白という言葉は、所々に見受けられる。まず『大毘盧遮那成佛神變加持經』いわゆる『大日經』の第七卷には、

次に當に衆聖に啓白するにこの偈を説いて言うべし。

現前の諸の如来、救世の諸の菩薩、大乘の教を断ぜずして、殊勝の位に到る者、唯願わくば聖天衆、決定して我を証知し各當に所安に随つて後に復た哀赴を垂れたまえ。⁽²⁾

と述べられている。諸仏諸菩薩に加護を願う内容は、後の表白文にもつながるものである。

また『金剛頂瑜伽中略出念誦經』卷第二には、

この印を以つて起ち已て、応に十方の仏海を觀すべし。一一の仏前に、己身は足下に住在し、一切如来を頂礼し、礼し訖つて、この密語を以つて、應に表白すべし、曰く、⁽³⁾

とあり、また『蘇悉地羯羅經』卷中には、

此の時に當り、誠心に礼を作し、再三して啓白せよ。大慈悲者、本願に依つて道場に來降したまえと請う。若し

誠心にあらずば、多くの念誦を徒にせん。乃至真言も亦皆慍重似せよ。⁽⁴⁾

とある。これらの表白あるいは啓白の記述はそれほど詳しいものではないが、儀軌においてはより詳しい記述が見られる。

まず『陀羅尼集經』卷第四「七日供養壇法」には、

手に香鑪を執りて胡跪し焼香す。一切の諸仏、般若、菩薩、金剛天等、及び一切の業道の冥祇とに啓白す。今この地は是れ我の地なり。我、今、七日七夜に都大道場法壇の会を立て、一切の十方法界諸仏世尊、及び般若波羅蜜多諸菩薩衆金剛天等の諸の徒衆を領するを供養し、一切の秘密法藏、難思議の法門を決定せんと欲うが故に、諸の証成を取りて、我、護身結界の法事を欲す。此の院内の東西南北四維上下に在りて、所有一切の正法を破壊する毘那夜迦、惡神鬼等は、皆我が結界の所の七里の外へ出で去れ。若し正法を護らん善神鬼等の我が仏法の中に利益有る者は、意に随いて住むべし。⁽⁵⁾

とある。ここではまず啓白の対象を明らかにし、法会を行うこと及びその目的を宣言し、惡神には退去を、善神には加護を願っている。このような様式は、後の密教の表白にも受け継がれてゆく。

これらの密教の表白・啓白は仏菩薩や神祇に対して申し述べられており、後世の表白とその目的は同じであるといえる。ただこれらの密教の儀軌の啓白は純粹に神仏に対して述べられているのに対し、後世の表白には、聴衆の教化や歓喜を意図した部分が見受けられる。実際に表白を聞いて感涙を流したという記録も残っている。これらを考え合わせると、表白はその起源を一方には顯教の唱導にもち、もう一方には密教の啓白・表白を持つといえるだろう。しかしながら後世の表白文においても、顯教のものと密教のものとは、その形式や内容において相違が見られる。

三 顕教の表白文における祈り

前述のように、表白文は顕教のものと密教のものにおいて相違が見られる。その相違点について実例をあげて見ていこうと思う。弘法大師空海の『統遍照発揮性霊集補闕抄』（以下『性霊集』）には数編の表白文が収められている。まず顕教のものとして巻第八の「孝子為先妣周忌図写供養両部曼荼羅大日経講説表白文」をあげる。

隆崇として頂き見えざるは妙高、渺漫として底を知ることなきは溟渤なり。毘嵐一たび発すれば自ら埃塵となる。日輪七つ重なれば尽く皆涸れ燥く。世上の強鎮すら其れ此の如し。人間に何物か常存すべき。十号の如来、滅を林中に唱え。三明の聖者、悲しみを河辺に起す。何に況や凡庶の類、誰か久しく保ち、霜露の質、何ぞ永く存せん。伏して惟れば、孝子が為の先妣尊霊仁愛物に深く、貞義人に超えたり。誰か量りし、至孝感無くして早く泉扉を開かんとは。始有り、終有るは是の世の常の理なり。生あるものは必ず滅す。即ち人の定まれる則なり。去る年の七月中旬に貞心に空病を示し、潔儀無常に随う。ここに孝子、夜台に満月の光を失い、日天に黒雲の影に迷う。眼泉悲涙燥くこと無く、心竈憂の炎休むこと無し。味を棄て、交を絶って、愁哀する際、居諸疾く廻って一周の忌忽爾として臨み来る。玆に因って法身の海会を移して両部の曼荼羅を作り、内証の微言を留めて七軸の真典を書す。昼の時は尊経の題を唱えて開き、夜の間には海会の尊を供養す。四衆の倫、尊敬して法庭に集る。五方の仏は随喜して何ぞ臨みたまわざらん。願わくは、曼荼羅の海会、一切の諸尊、無縁の慈をもて孝子の願を照らし、不請の願をもて報恩の事を愍れみ、必定して孝子が至願を成就したまえ。⁽⁶⁾

これは孝子が施主となって亡き母の一周忌の法事を行った際の表白文である。

ここではまず、妙高山のような大きな山も埃塵となる時がやってくるし、溟渤のような大海も涸れて乾くことがあることを引き合いに出して、人の命のはかなさを説き、また釈尊やその高弟さえも滅するということを述べて、凡夫の命の短さを説いている。次に孝子の母に対する貞義の大きさを、それにもかかわらず母が早く亡くなった事、生者必滅は世の常であることが述べられている。それから母の発病から死、孝子の悲しみの深さ、一周忌にあたって、两部曼荼羅を作り、大日経を写経し、供養し読経することが述べられ、最後に諸仏諸尊に孝子の願いの成就することを願っている。

ここでの祈りは孝子の母に対する親孝行が成就することを諸尊に願うことにあるが、それに至るまでの部分には、仏菩薩に対してではなく、法会に列席した人々に、人の命の無常を説く説法にもなっている。

次に解脱上人貞慶の作とされる『表白集』の上巻にある「孝子為先妣追善（四十九日）」と題される表白文をあげる。

夫以ば、子は母を以て貴しとす。先賢の詞は肝に銘じ。母は子を以て貴しとす。故人の文心に染む。我等、今慈堂の養育によつて、適人寰の生長を得たり。其の恩尤も深し、億劫を歴ると雖も争が謝尽ん。其の徳大いに厚し、多生を送ると雖も豈に報を窮んや。縦い少分と雖も寸心を抽き宣く。是を以て、大施主、四十九日の忌景に相当て、三十二相の妙果を祈らんと為す。専ら篤信の懇念を抽き、泣は出離の良因を萌さす。仰ぐ所は西土引摂の聖容、新に金姿を無上の妙相に顕す。帰する所は中道実相の真文、墨字を法性の制底に写す。便ち密場に就いて、聊か講席を展ぶ。仏は常に之を道場に安ずべし。以て平生の昔の姿に代え。経は後に之を墳墓に送るべし。先亡の新骨に解れん。風其の辺を吹く、則んば諸の魂皆業障の塵を払い。雨其の上に灑ぐ、亦余類悉く解

脱の潤いを受く。況んや尊霊において豈に成仏を疑わんや。昔波斯匿王百歳の母に訣れしにや、十善の袂乾くこと無し。今、孝子施主八旬の母を喪するや、千行の涙豈に尽んや。冀わくば恋慕の深思を以って、翻して引攝の良縁と為す。然れば則ち、四十八願莊嚴の土は金蓮座を開きて早く進まん。二十八品演説の門は宝車轅を廻して速に導かん。善願の趣、蓋し斯に在らん。所修の惠業を以って尊霊を資し奉る。五障三従の昔の姿は、変じて四八瑞蔽の妙相となり。十号万徳の今の粧は、添じて億千無量の光明を放つ。他功帰本の故に、大施主、現世百年の間には久しく行業を不退地に積み、臨終十念の刻みには必ず託生を安養界に遂げん。親属皆一仏の浄土に詣し、群生併せて六趣の昏衢を出でん。⁽⁷⁾

これも先の『性霊集』のものと同じく、亡母の供養のための表白文であるが、その内容には大分違いがある。

ここではまず、子が母を、そして母が子を貴しと思うことを述べ、母の恩は甚だ深く、感謝し報いされるものではないが、少しでも恩返しをするために四十九日の法事が執り行われたことが述べられる。供養の為に阿弥陀如来の仏像（あるいは仏画）が作られ、『法華経』が写経されたことが述べられ、これらの功德によって、亡母の成仏が間違いないこと、また孝子の悲しみの深さが述べられ、その恋慕の深さが引攝の良縁となるということが述べられている。さらには阿弥陀如来の導きと、法華経の功德によって、成仏の道を速く進み、最終的には極楽往生のみならず、三十二相、十号、万徳、無量の光明を具した仏となることが説かれ、この功德によって施主も現世においては功德を積み、臨終後は極楽浄土に往生し、親族も浄土に向かい、あらゆる生物も六道を出でることが述べられている。

ここでの祈りは、亡母の極楽往生と成仏を願うことである。この願いの背景には、浄土信仰と法華経信仰があり、天台宗との関わりの深さが伺える。その点では、この表白文を法相宗の貞慶作とすることを疑うことができるであらう。

う。

次に天台系の追善供養の表白として、勝範選の『智無智通用集』巻第三に収められる表白文を取り上げてみる。

夫れ以れば、生者必滅は南浮の常の掟、会者定離は忍界の定れる法なり。然るに三界の独尊は尚涅槃の粧いを沙羅双樹の本に示し、高祖智者は既に遷化の相を石城靈尊の前に顯す。何ぞ況や底下の凡夫、薄地の愚迷に於いてをや。爰に新円寂○年月旧居を辞して黄泉に赴く。而るに靈魂は柔和の相を備え、違順の縁を簡ばず。慈愛の徳を示して道俗の別を弁ぜず。称名念仏の功德懈ること無く、後世の菩提の営み廃すること無し。誠に淨信の優婆塞亦是希有の丈夫なり。然りと雖も有為必滅の朝露の命忽ちに消え、夕陽の影永く隠し、孝子等の慈しむ顔色去りて帰るべからず。悲しみて哀傷絶えて見るべからず。故に亡魂出離生死の善巧に回向せしめ、極楽不退の淨利に授のみ。乃至……⁽⁸⁾

この表白文の最初は前述の『性靈集』のものと同じく、生者必滅、会者定離の理を述べ、釈尊の涅槃、天台大師の遷化を引き合いに出して、凡夫の死の必然を説いている。その後故人の人徳や供養法要の功德、遺族の悲しみが述べられ、最後に極楽往生への願いが述べられている。

この表白文における祈りも、往生極楽であるが、やはり生者必滅の理や法要の功德を遺族に説くという説法の意味合いも強いと感ぜられる。またこれは汎用の表白文なので、個性が抑えられ、感情の吐露も控えめなものとなっている。

四 密教の表白文における祈り

次に密教のものとして『性靈集』巻第九の「高野建立初結界時啓表白文」をあげる。

沙門遍照金剛、敬つて十方諸仏、両部の大曼荼羅海会の衆、五類の諸天及び国中の天神地祇、並此の山中の地・水・火・風・空の諸鬼等に白さく。夫れ形あり識有るものは必ず仏性を具す。仏性法性法界に遍じて不二なり。自身他身一如として平等なり。之を覚る者は常に五智の台に遊び、之に迷う者は毎に三界の泥に沈む。是の故に大悲大日如来独り三昧耶の妙趣を鑒みて六趣の塗炭を悲歎したまう。如実智の雷、法界の殿に震え。秘密の曼荼、閻浮提に伝わる。金剛薩埵、龍猛菩薩に伝え授けしより、師師相伝えて今に迄るまで絶えず。遂に弘教和尚、弁正三蔵、錫を振つて東来して漢地に流伝して、群生を拔済せしむ。然りと雖も地泓海を隔てて人機未だ熟せず。教秘閣に韞んで未だ此の朝に及ばず。ム甲、幸いに諸仏の加持力と幽明機熟の力とを頼つて、去る延暦廿三年を以つて彼の大唐に入る。大悲胎藏及び金剛界会、両部の大曼荼羅法並に一百余部の金剛乘を奉請して平らかに本朝に帰れり。地相應の地無く、時にまさしく是の時に非ず。日月荏苒として忽ちに一紀に過ぐ。爰に輪王、運を啓いて此の法を弘めんと擬するに、必ず須らく其の地を得べし。四遠を簡び択ぶに此の地ト食す。この故に、天皇陛下、特に恩璽を下して此の伽藍の処を賜えり。今上には諸仏の恩を報じて密教を弘揚し、下は五類の天威を増して群生を拔済せんが為に、一、金剛乘秘密教に依つて両部の大曼荼羅を建立せんと欲う。仰ぎ願わくは、諸仏歡喜し、諸天擁護し、善神誓願して此の事を証誠したまえ。所有東西南北四維上下七里の中の一の惡鬼神等は皆我が結界を出で去れ。所有一切の善神鬼等の利益あらん者は意に随つて住せよ。又願わくは、此の道場は

普く五類の諸天及び地・水・火・風・空の五大の諸神并に此の朝開闢已來の皇帝皇后等の尊靈、一切の天神地祇を以って檀主とす。伏して乞う。一切の冥靈昼夜に擁護して此の願を助け果せ。敬⁽⁹⁾って白す。

この啓白文は、高野山に堂宇を建立するために初めて結界をはった際のものである。ここでは、最初に諸仏・諸菩薩、諸天、諸神へ申し述べる表白であることが宣言され、続いて、密教の教理、真言宗の歴史、この法会の由来と目的を述べ、諸仏・諸天・善神に証誠を願い、悪鬼神の追放を祈り、諸天・諸神・皇族の尊靈・一切の神祇に擁護を願っている。最初の諸仏等に対して申し述べる部分は、密教の表白文が共通して持っている型である。また『大曼荼羅を建立せんと欲う。……所有一切の善神鬼等の利益あらん者は意に随って住せよ。』の部分は前に述べた、『陀羅尼集經』の啓白文にほとんど同じ部分が見られる。これらの密教の啓白文としての特徴は、顯教のものとの相違を示すものではあるが、全体の構成を見ると、教理を説いている部分や、法会の目的を述べ、その達成を願っている部分などは顯教のものにも見られるものである。

ここでの祈りは、密教の弘教とそための道場の建立の願い、諸天、神祇への守護を求める願いなどであるが、これは高野山の建立という法要の趣旨に随うものである。

次に印融の『諸尊表白抄』からの表白文を取り上げる。「阿弥陀（滅罪・往生）」の表白文を見てみる。

敬って真言教主大日如来、両部界会諸尊聖衆、殊に別しては極樂化主弥陀如来、觀音、勢至、諸大薩埵、総じては尽空法界、一切三宝に白して言さく。夫れ阿弥陀如来とは功德を蓮花部の中に宰って、本性清淨の覺路を通さん。加持を濁惡世の際に垂れて、説法斷疑の智門を排しひらく。寿命無量の聖尊なれば、胎卵湿化悉く其の汲引に預かる。光明無量の靈像なれば、動靜飛沈併せて彼の照臨を蒙る。しかのみならず、超世の別願を立て極重の

悪人を導き、浄土の宝台を構えて、穢土の群類を迎える。一念弥陀の人既に重罪を滅す、況や五相成身の観に於てをや。一称名号の輩又往生を遂ぐ、矧んや三密加持の行に於いてをや。爰を以って護持某、清浄の壇場を開きて、瑜伽の秘法を修す。若し爾らば、現受無比楽の願い早く成円して、後生清浄土の望み速に満足せん。乃至法界を平等に利益せん。敬って白す。⁽¹⁰⁾

この表白文は、密教のものではあるが、浄土教の教主である阿弥陀如来を本尊としており、前節の顯教の供養のための表白文と共通する点も多い。

構成を見ると、最初に諸仏・諸菩薩への敬白が述べられているが、阿弥陀如来の特色としては、観音・勢至といった眷属に対して申し述べられていることがあげられる。次に蓮華部の主宰であること、惡世に加持を垂れること、寿命無量・光明無量といった特色によって衆生を教導すること、極惡の人をも導き、穢土の衆生を救うこと、密教の修法によって滅罪や極樂往生ができること、最後にこの秘法によって現世に安樂を得、極樂往生を願うことなどが述べられている。

ここでの祈りは、滅罪と現世安穩と極樂往生であるが、興味深いのは、阿弥陀如来を一念することで重罪を滅することができると、五相成身の觀を行えばなおさら滅罪できることや、名号を一称することで極樂往生できるなら、三密加持の行を修すればなおさら往生できるという、親鸞聖人の惡人正機説とは反対の主張がなされていることである。浄土教に対する対抗意識が強いことが窺える。

五 まとめ

今回のテーマである「仏教における祈りの問題」との関連性において、表白文における祈りをもう一度考えてみると、その問題は単純ではないことがわかる。表白文の祈りは、神仏に対する祈願であると同時に、仏教教理の説法であり、法要の意義の説明であり、施主の努力や思いの表明でもある。表白は祈りでありながら、施主や聴衆の心を安楽に導く力があるのである。この祈ることそのものに救いがあるというのは、仏教における祈りにとっては大事なことでないだろうか。

最初に述べたように、表白文は非常にたくさん数が残されている。その中で今回取り上げたものはごく一部であり、この少ない例を持って何らかの結論を得ようとすることは、不可能といわざるを得ない。しかしながらこの少ない例の中にも、表白文の重要性は垣間見られると思う。表白文には、その作者の仏教観や信仰、作成された時代背景、法会の意義や目的、施主の信仰や状況などが含まれており、それを読み解くことには、様々な意義があると思われるのである。

註

- (1) 『大宋僧史略』（『大正藏經』54巻P242a）
- (2) 『大毘盧遮那成仏神変加持經』（『大正藏經』18巻P53b）
- (3) 『金剛頂瑜伽中略出念誦經』（『大正藏經』18巻P237a）
- (4) 『蘇悉地羯囉經』（『大正藏經』18巻P615a）
- (5) 『陀羅尼集經』（『大正藏經』18巻P813c、814a）

表白文における祈り（桃尾幸順）

表白文における祈り（桃尾幸順）

一一一

- (6) 『統遍照発揮性霊集補闕抄』（『日本古典文学大系』71P 356～358）
- (7) 『表白集』（『統真言宗全書』第31卷P 33～34）
- (8) 『智無智通用集』（『天台宗全書』20卷P 30～31）
- (9) 『統遍照発揮性霊集補闕抄』（『日本古典文学大系』71P 408～410）
- (10) 『諸尊表白抄』（『統真言宗全書』第31卷P 159～160）